



復
雙

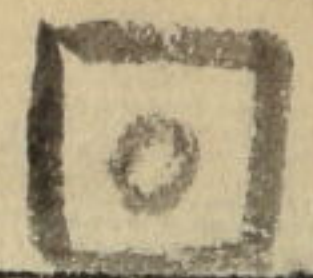
月冰奇縁

一

^ 13
3103
1



13
3103
-5



亭德年問復離小說

江戸曲亭主人著

月氷竒縁

浪華

文金堂藏

自序



夫神靈怪異稗官野史所不載。有出於臆度之外。而至理存者焉。噫呼。天地大矣。萬物噴矣。惡乎有。惡乎不有。且人。人視聽不越几席之外。而復趾亦不出里巷之內。非以情

月氷竒縁

卷之二

一

門 八 13
3103
卷 1

揣則以理格焉。是亦井 系性而
已。予稟性疎庸。一書一 架之
外絕無他嗜好。每岑寂之時。
喜錄閩里碎言。臆友晤譚。日
積稍久。漸篇盈。乃頽曰。月水
奇緣。聊借釋氏刀山劍樹之
喻。以寓化人解脫之微意。雖

未免撈水弄月之誚。些可
懲惡獎善。讀者鏡焉。庶幾迷
津之一筏矣。

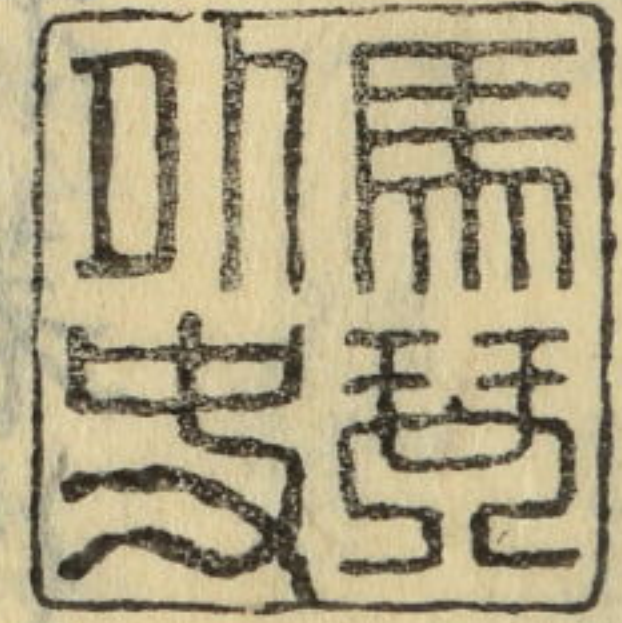
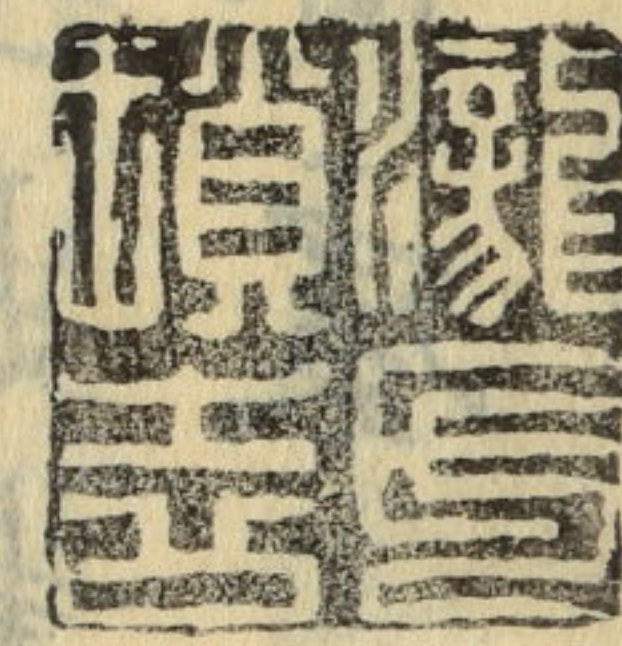
享和三年歲在癸亥春二月
上浣曲亭蟬史書於著作堂
南牕紅梅深處

明水齋錄

卷之一

一

内息...
 土...
 喜...
 朝...
 未...



復讐うらみ小説せつごつ月水奇縁げつすゐきえん總目錄そうめいよく

通計十回

全部五卷

昭和九年七月三日 晴末

全傳ぜんでん補光帝おぎろくの應永おうえい三十四年さんじゅうよんねんより後花園帝ごえん元亨げんこう二年にねん不致ふちやく九
 十九年じゅうくねんの奇蹟きせきを紀をきし藻もを繞をめぐり或あるは雅みやびあり或あるは俗しやくありてあつらひの
 の鮮易せんえいふとまへに曲まが士の杜撰つせんまうし一ひと體たいを脱だつる身み

卷之一

第一回

第二回

蠻ま夸か貢こう鳥とり釀じゆ禍わざはひ
 國くに宰さい試し鼠ねずみ探たん獄ごく

授まづか二ふた物もの老ろう師し說せつ二ふた因いん果くわ
 投な二ふた金かね寃うらみ鬼おに索さく二ふた解かい脫だつ

卷之二

第三回

觀音堂靈箭救二相女
滋賀山強弓走阿紫

第四回

隔樓絃管運情
停船釣竿叙思

第五回

驚二獼猴倭文熊二第簷
逐二野豬氏漢登二雪嶽

第六回

吉埜河枯樹涔遭春
妹夫山壽松親折風

卷之四

第七回

忠臣促駕歸鎌倉
貞婦典身赴二歧岨

第八回

陷二仇家玉琴死節
過二客店倭文感操

第九回

壯士听詩謝恩
孝子占夢復鱗言

卷之五

第十回

陰陽和合熊谷坡
劍鏡奇遇馬籠巔

姓氏目次

○氏將

足利成氏

佐々木高負

植松憲忠

植松房頭

○夫人

膳子

○陪臣

永原左近

海部大膳

中村兵衛

○孝子

熊谷倭文

○婦女

唐衣

初女

玉琴

漣漪

六田度婆

○劇賊

石見太郎

海道二

夜叉五郎

○處士

三上和乎

上市丹治

○家吏

上市喜内

御平

軍内

○舊師

丹藏

丹平

○醫家

足立韶景

早瀬蟹庵

○浮屠

拓率老师

通計二十有七人

附評

禽獸

船未山雞

閑室鼯鼠

千年靈瓶

檻中豺狼

雪中野豬

白毛猕猴

寶器

羽佳宝刀

玄立明鏡

郡縣

相州鎌倉

和州吉野

信州岐祖

江州滋賀

月水奇縁總目錄畢



星彩滿天朝北極
 源流是處赴
 東溟
 為臣為子須
 忠孝
 莫負宣尼一卷經

白虹時
切玉紫
氣夜干
星鐸上
芙蓉動
匣中霜
靈明



三德性尤靈

萬般物象
皆能鑒一
個人心不
可明匣內
乍開鸞鳳
活墓前高
挂鬼神驚

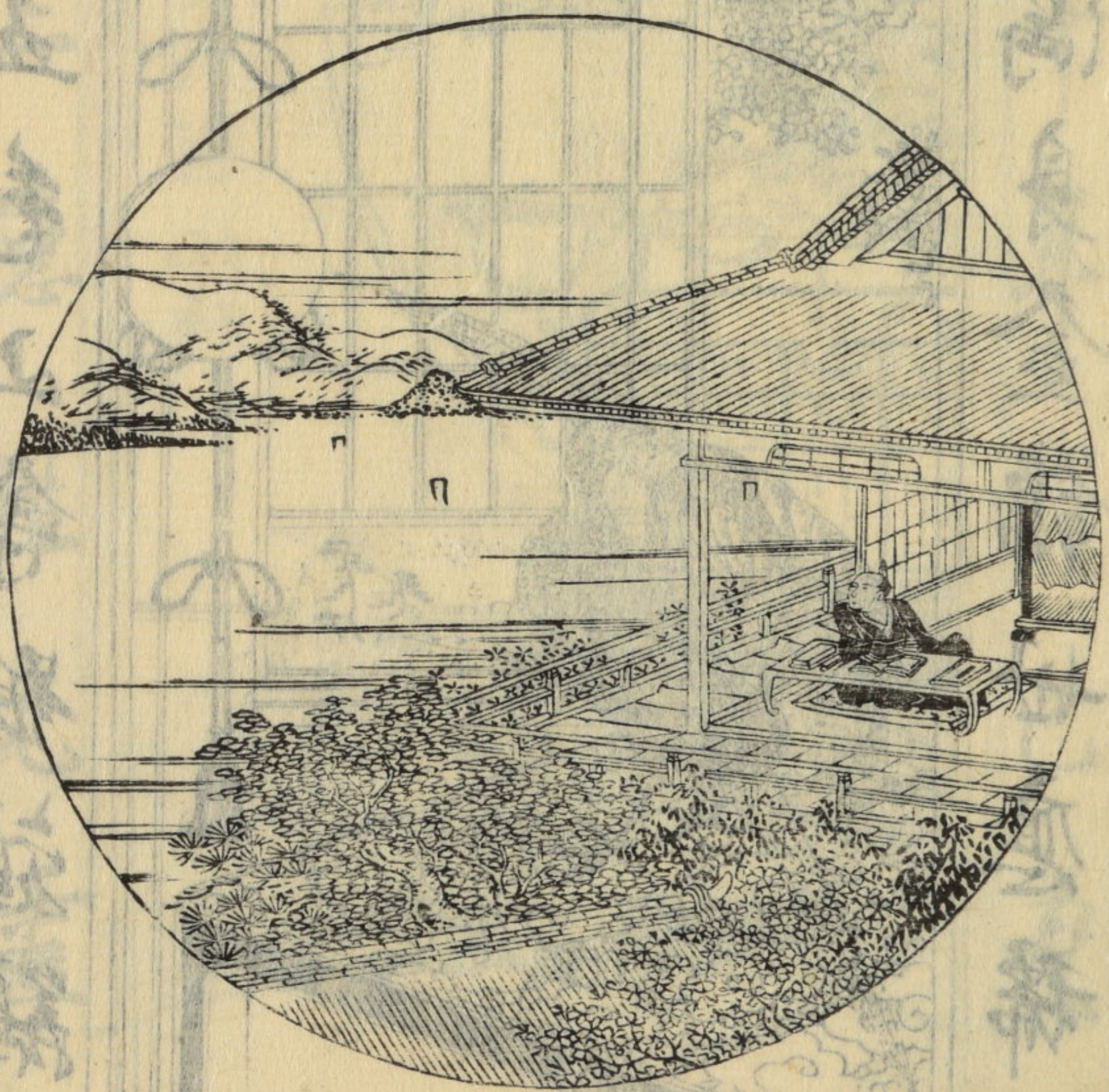


滿身金錦世應稀

第一篇

江州志賀
舊都

山名水光陽
旭斜先無鷄
犬有啼鴉千
村萬落皇都
迹不見入煙
空見花



月氷奇縁卷之一

東都 曲亭馬琴著編

第一回

蛮夷貢鳥醜殃
國宰試鼠探獄

天小風雨の變ありと死ハ五穀とのぞ。國小干戈此難ありと死之万民
困窮也。本朝元弘建武の兵乱より以來開戦少む時多し。邦潰
民はるど。瘦狗原野に斃春燕林木小巢る足利尊氏公より三代
義満將軍の治世小ひ多り。天下を免て泰平を歸し。士民や安堵
以應永四年夏四月義満公北山殿小隱居し。室町此營中を西
世將軍義持小ひりありあり。不於て義持嚴君義満不かり。天下
の政を觀ありと數年五化四海に布四夷來貢以時小稱光帝の

馬を營中これ厩に繫せ山鷄を江川の刺史佐々木高負に屬養
せし致抑佐々木氏に鼻祖宇多天皇の龍種敦美親王より先て源
姓を賜ふ王の末孫兵庫頭成頼を屬の臣となりて江州佐々木の
城に居住し佐々木氏と稱せしむる高負は成頼より五代源三
義六世に嫡孫佐渡入道道譽の係嗣ありて江州觀音寺に在
城に北陸七州を管領し多賀六角淺井の支度ありて一城に
またり高負件の山鷄を乞ふふこの鳥尋常のりれありあま
ちく。そのうち孔雀より大き頭は丹朱の雞冠を以てて其身に
金錦の五采を具足し鮮明炫耀りつとも愛びて一級あり金
銀珠玉を鑄龍鳳花卉のちを刻飾る真紅の綱をりて

やりの高負欣然としてのほろ今執事管領君龍不辨りの
お母とといども邂逅南蛮來貢の奇鳥をりて予ふあけけ
王家の面目何うこそふ志らんぬく籠中不養巢れうち雛成
得て將軍の御威ありあけかぐ。志うれども異邦に名鳥四時此
寒暖を察し籠畜せんといと安らうと孰れれふらうとよく
この鳥を養狎んとす時一個の氏士諸士の班をせしむ出君
公ねがらぐこの鳥を臣畜せんとし高負は之を乞ふふの
人年紀二十八九身丈高く面色白頭一頂の鳥帽子を戴け
身不纏纏れ素袍を被たりこの人は是佐々木の遠流永原左近
尚洞と名告すをち高負の老臣あり左近頭首しし。臣
前年このとき和漢の名鳥を養ふ終不籠飼を悞らば夫山雞

あるひ錦雞と号この鳥さうさ毛のいろを愛し水もその影
をうつして終日去るは遂不眩溺死せといふ。魏の時南方山
雞を獻せ帝その鳴奔人とを欲めども由なり公子蒼舒大を
鏡をその前ふ著しむ鳥おのせが形を鑑たりち鳴奔て止とを
ぞ終不死さるとや蕭仲將これをあつとて賦ありとのと異
苑不祥なり。さしハ唐の李商隱が破鏡の待む。

玉匣清光不復持

菱花散亂月輪虧

秦臺一照山雞後

便是孤鷺罷舞時

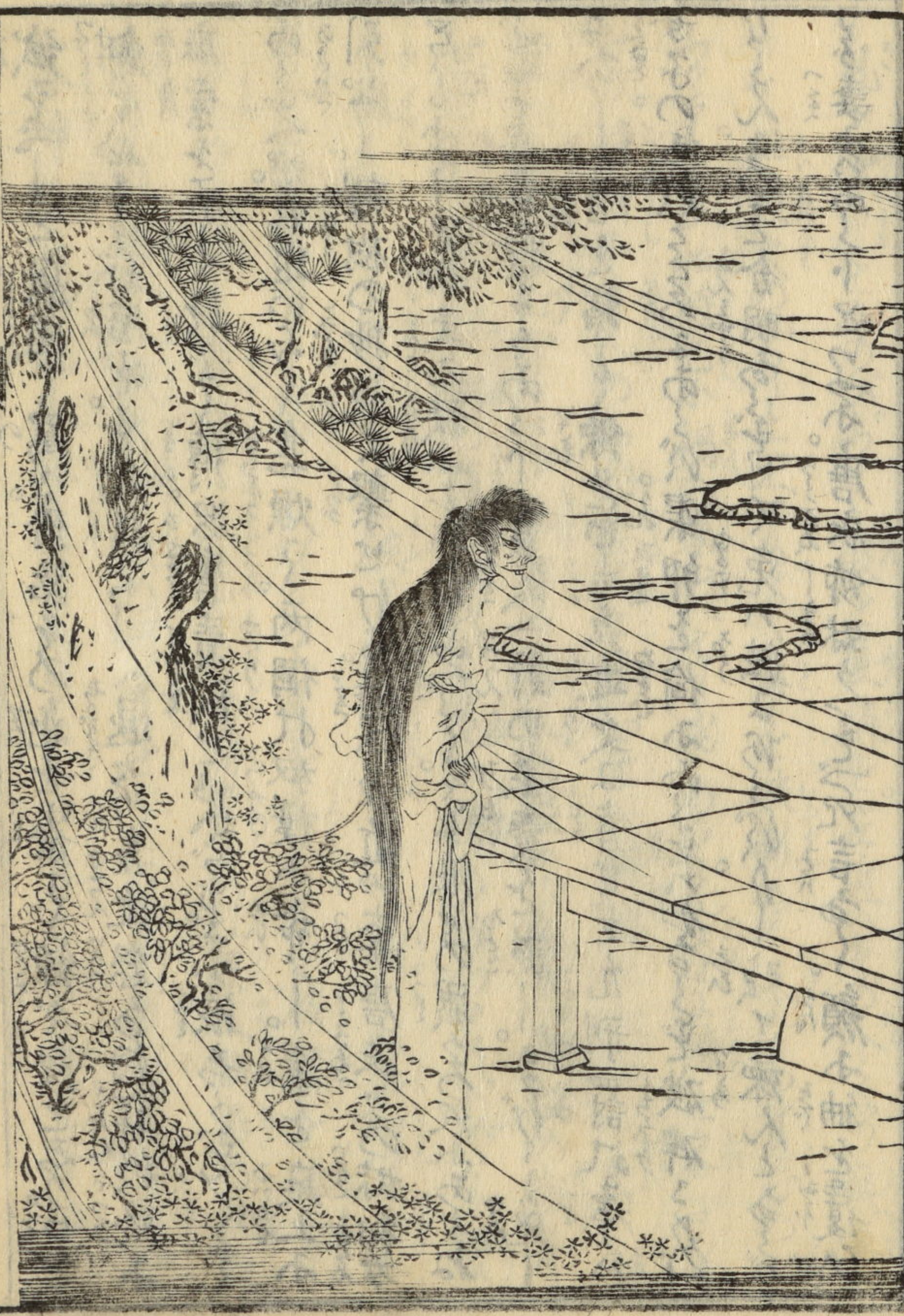
と作せるは是なりあるはとるを人丸の和歌ふ

山とりのをその初尾不鏡かけさるふとをさるさうけ免
と録し又その鳥宿と死ハ雌雄さるは峽を隔て栖と萬葉集ふ

おとどもおひもつあ引のふぶれ尾のやぶれこのよを
とらふ。又あかく一夜をむさろの寝人と咏せ山雞の性人ふ別を
さしを養狎人と容易さるはとらども臣る別ふ身あり公う
そが心を中えて養いぬると言語水のるごとく和漢の故事を
奉る精れ免さるは高負心中とよらるるに完ふとて終てまら
これ海がとをさるさるなり。今この鳥をわかくし元是室町家
よりあづかりなる鳥るをめて若等因りて保あつて汝が一身を
養のさるさるの罪全くされ不帰も汝の性短そむむ色はこれ
その退あえんを怖る日夜よくるるを用あつとて疎ふること
あるは左近唯とて命をうけあめどが依守る志賀の馬城
ふ庭籠を修造四方ふさく築塙を構て狐狸の害を防た又

功ありく名鳥を不えて卵を生ぬ。明日これを主君不獻下。褒
 賞ふあづらうとやとせりあり。奴婢へさきて廉忍あるのみまはり
 恨てうち痺さるもあはれど誰あもあはれ許あくまこの一室に
 入とわらうとあめると命まじき丹治かしてきてたらぬ。左近と長
 こころうらさび独卵をふかえてあけその巢中れ養をささるまらふ
 暮春の天氣遅くと朗不白鳥紙窓を射く竹影を画院暖
 風肌膚中も閑室睡眠をりあり。おひごれ不倚をひて生寝
 けらぐ女選ありく覺て九よをるるに器中れ卵一つをせく只
 あらまればさういかにおどろけ又身を側り身後を首不射然
 腰不衣を被たり。左近勃然とて是を除維うらが裳不衣を被
 まりてとる中不ゆれば侍見漣漣とて出流ていへ。妾家公

の假寝をささるえく。のく々風邪れ患やあうんと私不衣を添
 おおとせりと言ひ託さるふ左近怒心顔不復たはらさる浪が聲
 相と。おどろけ許を得く。櫻不この室よ入て卵をうらあひるぞ。さ
 こを返せ偽陳く欺はる何若痛を受るにぞと春をあげて
 髮際を連撃ぞ毛髪をささる艶顔聲家公ゆらたま
 妾實不卵をささるばと叫左近はさく憤あふほらうおんゆ
 する時丹治うて来て辣らく君日未の寛度ふもあげあく。など
 女児を鞭うらあへる。少刻怒をささるくこを問ふといふ左近
 丹治を礮と疾視さう行の顔ありさう。朗不舌を動さや嚮
 ふりれ人をこの室不入ささるまてと命ぞ。おどろけ中
 を引出たり。おどろけ退けこれ賊婢をささる殺くのち新刀を



然とて一と敷圍て罵る丹治その花を察く練がたを去り口を
 鉗くゆきむ言ぞとどくとして退り左近怒る内解け終ふ
 麻索をりくほく縛只言責問といへども浪あふむくや
 あらぐべ左近いやく焦燥く。兩個れ奴僕小命。渠を庭上ふ
 引出。櫻樹の抄を繫せける時ふ左近が妻唐衣の妹初女
 ともふりて出夫の使ふむりてし。浪あみの罪あふあね
 渠悪意あるもあつ。良人一片の義愛を施し。免
 ぬ。言を謂く練とて左近更に肯せせ九刑罰れ事ハ
 女子のちれとらふあ。渠卵を偷ふあ。破砕るの
 なるん。と分明あ。免ハ法あ。強て練人とあふ
 妻あ。と。唐衣姉妹く。顔小袖を覆ひ。

氣を吹声をあひ。彼を哀憐と左近ハ人。直に
 性烈火のど。事を決断て人をあ。心
 此時已禍の来。老あり。遂に練を容。後
 侍婢お主人の。怒ん。姉妹をた。後
 堂に出ぬ哀む。浪身ハ喬木の枝。鞞の
 髪ハ櫻樹の梢。花ハ柳のは。雙
 手。素皮肉を破。涙潜。樹下の土。下
 心。奴僕あり。杖を。枝條を揺動。花
 散乱。只。冥府閻羅城。獄鬼の杖。追
 追。更。大喚大叫。嗚の呵責。小髻。痛。心
 神。乱。眼。看。口。言。三井の晚

鐘先常をほげく。粟津ふるる群鴉も。か身をあぐくと疑る。
さ浪今の苦痛不堪ぞ声さあがりて。家公顔の六ひきり
めをとり。あゝ実をり。告げん。左近これをや。呵。とら笑
は苦痛ふ。さぞい。首伏せ。これそのら釋ま。さ浪又云
妻元未思意。恨て卵を破碎。家公の怒めんとを怕て。密に
を捨たり。その罪千引。此名も。重とい。とも家公十分のあはれを
をりて。妾が一命をとり。あゝ左近冷笑。さこそあめ。さる
をわさ。疾い。將釋。得ま。と言つ。木履を穿。さ
庭上。おと。指より降る。一條の索を。目ざ。只一刀。おま。と
断。さ浪。地上。お礎と。落。俄。さ。息絶。さ。雨。僕。慌。忙。一個
これを抱起。一個の槽架の水を。掬。口中。お。決。さ。糸。緯

それ為何。左近。さ。免。怒。を。お。さ。め。這。婢。自。業。自。得。死。を
さ。誰。を。ら。う。と。い。ひ。ん。亮。隔。引。た。さ。裡。面。入。さ。バ。奴。僕。お
刑。罰。の。刻。急。を。さ。ん。ん。心。中。且。お。ま。れ。且。哀。と。屍。を。お。外。原。お。ぬ
この夕。梅。英。雨。清。さ。さ。て。窓。竹。さ。さ。漏。刻。枕。お。ぬ。夜。お。れ
つ。つ。間。あり。左。近。い。る。一。室。お。の。こ。さ。ら。鬱。と。た。の。い。さ。さ。次
お。と。り。燈。を。掲。書。帳。を。お。れ。史。記。の。李。斯。が。傳。を。續。お。
太。倉。之。鼠。飽。食。而。不。驚。廁。下。之。鼠。穢。糞。而。畏。人
と。い。ふ。と。さ。ら。お。至。り。燈。を。お。ぬ。陰。さ。さ。忽。地。う。ら。お。瓦。置
い。と。と。り。お。音。お。け。お。首。を。回。し。て。これ。を。さ。さ。一。隻。の。老。鼠。お。ぬ
走。り。完。子。入。ぬ。左。近。さ。さ。あ。や。燈。を。お。ぬ。顔。を。九。紫。お。ぬ
陽。睡。さ。さ。を。定。規。女。選。あり。て。鼠。又。完。を。お。ぬ。九。下。お。ぬ。了。ま。り。

再三四下をうりて既小主人熟睡乃かちを視て遂尔几上を走
 登り前足をのりて器中の卵を抱く。この時許多の鼯鼠忽然
 ころり出出前小主人の左鼠の尾を銜く後引引バ次の鼠又
 その尾を銜。鼠鼠連々ころり次弟小主人の尾に附く。遂に
 を合せく更小引ゆく。と敷百歩已不完入。入る時小左近几
 礮と打べ群鼠の響はあつた。卵を捨尾をころり完小入。ぬ
 友近この光景をえりて驚き慙愧。嗚呼鼯鼠も亦肉食を偷ふ
 智あり人間却邪正を照し眼を。今鼠の卵小実ををえりて
 先の一卵もこれか。盗りて疑へる。あつたを吾智深慮
 足りてをを曉せ罪を。浪小啼著て糞小所責と渠苦痛小
 堪む。ころり不正に陥ては実の罪小死を吾過てり。吾過てり昔時

唐の蘇味道茂稜。二端小持。久々しててのら邪正のつら
 ころり古今廷尉の訟を聴獄を断て實容易く。久と亡結。疑
 念たらずら散。只管後悔。ころりぬ。浪が死をあらはし。石子の色を
 葬せ僧を供養。善事を修し。つらつらその亡霊を斥祭けり。
 第二回
 授二物 左師 説因果
 授千金 冤魂 索解脱
 是年の夏永原左近が宅小怪異。こを出来た。色嬰妻朝起て
 炊人とまふ。柄杓抄め。ころり確。庖福をころり。者甚磨と押ころ
 兒着ハ盆鍋姐のたぐひ。ころり板架をころり。或ハ深のこ小附。或
 ハ機板をころり。奴婢よこををころり。の六神を。累仆く頭を
 拳りて。女刻。肝響志。ころりぬ。一人ころりを強て左右を

驗あり。病者こそよく衰く向死とせ。左近今の術計竭てる何
 り。ある人をくく云云。井小稀世に客僧あり。その名を花華左
 師といふ。この僧元華人なり。近曾園城寺に寓居せり。く般若
 不通。正覚不見。足一。過去未来劫を察して吉凶を判別し。
 精鬼を駈く。苦病を退治せ。多くこれを招く。令政の病を治
 せ。めぬと薦せ。左近大ふらむ。む礼を尊く。かの僧を招く。
 次の日左師来り。左近出逢く。これを思ふ。貌ハ松と葉不瘦
 心の繁を將く。活ふ身不忍辱の鎧を被足。不募縁の鞋を穿右
 小鮮虎の鐸を採。左小降龍。鉢を捧。飄然とく。抗き
 ぞ。左近頓不信伏。とまら。近殊く云。左師ねふ。荊婦が
 鬼病を濟め。僧よく足下の宅地禍の根なり。生死と

佛ものごとく。貪道いそ。救が。且婦人の死。且夕又迫。足下
 又劍難れ相あり。よく及と。と袖を拂く。おんと
 左近意ふ。引さめ。左師の。一術を惜め。おん。く
 禍を復く。福をむ。荊婦が鬼病を濟め。と再三再四。請く止
 せ。僧の言の信。あるを察。ゆ。び。中。つ。云。禍も除く。病
 も治せ。ば。是。天。多。あ。あ。と。足。下。原。忠。義。の。士。多。り。く
 捨ふ。忍。せ。れ。ふ。一。口。の。戒。刀。一。面。此。明。鏡。あり。今。こ。を。授。べ。と
 法衣。此。袖。より。さ。り。せ。し。ま。ら。ち。示。す。云。この。劍。を。利。佳。と。名。つ。く
 鞘。に。山。雞。を。装。と。せ。り。又。鏡。を。玄。丘。と。号。せ。背。小。蘭。菊。を。鑄。た
 了。劍。ハ。令。郎。源。五。郎。の。防。身。刀。と。て。生。涯。身。を。離。さ。せ。ぬ。べ。し。
 鏡。ハ。家。此。良。の。柱。不。柱。や。了。この。二。物。并。の。ぐ。く。精。鬼。を。駈。に

目をあやぐ過七の追鷹小間を、且拈華老師に言神のぞけ不驚嘆
 一。る月、のちみちる禰ろあくとそつろ齋志、を異を祈る不劍
 鏡の衛護やありげん。その後の家内不怪もあくと妻れ中陰もあつ
 といや、早晩ならく既不立秋の節とありたれば親族集會てそ
 壯年の鰥を在ん、嬰兒のるあもあつ、且婦妻を元家内、事不
 費雨、いや、後妻を娶えり、誰彼と擇ん、り相女あつ、と
 原五郎が為、み、従母あり。是ふそそり、のやあ、あ、と、歡の中、れ、ろ、を
 たりありと薦、れ、た、近も、不、免の、ほ、と、八、固、辞、り、を、ぞ、の、言、と、く、
 理、あ、を、の、く、落、止、ご、く、あ、ろ、う、い、る、る、相、女、の、お、り、さ、ろ、を、も、聞、て、あ、
 る、一、渠、別、意、を、元、不、放、り、近、日、主、君、不、請、て、婚、を、と、ろ、あ、つ、と、い、ふ、不
 親、族、も、ろ、と、び、て、相、女、も、も、ろ、と、を、い、ひ、せ、り、ろ、ろ、の、准、備、を、あ、り、ぬ

浩処小之上和平の相女を眷恋し、く、ろ、ろ、あ、つ、ひ、ま、あ、く、と、び、く、永、原
 が家、不、い、ま、り、て、妻、女、の、不、幸、を、慰、問、し、ろ、を、あ、つ、相、女、が、顔、を、を、を、
 十分、の、た、の、と、ろ、て、徒、不、月、日、を、お、り、ろ、ろ、が、倍、と、ろ、ろ、は、れ、ろ、ろ、あ、つ、と、
 ろ、れ、あ、つ、ろ、ろ、あ、つ、ろ、ろ、あ、つ、ろ、ろ、あ、つ、ろ、ろ、あ、つ、ろ、ろ、あ、つ、ろ、ろ、あ、つ、
 朽、惜、と、ろ、れ、か、く、ゆ、を、そ、ろ、ろ、媒、氏、を、の、く、婚、を、終、了、と、え、ろ、ろ、と、遂、に
 早瀬蟹庵とい、醫師をか、ろ、ろ、た、近、小、の、事、を、い、つ、せ、ろ、ろ、い、た、近、れ
 を、あ、つ、て、上、上、氏、の、事、ハ、れ、平、生、た、の、為、人、を、あ、つ、て、秦、晋、と、ろ、ろ、人、不
 妨、ろ、ろ、あ、つ、あ、つ、と、この、上、を、放、り、障、あり、て、その、ひ、が、ろ、ろ、其、ハ、後、小、知
 ら、れ、ろ、ろ、と、答、え、入、蟹、庵、ろ、ろ、ろ、ろ、と、ろ、ろ、と、和、平、あ、つ、ろ、ろ、言、と、和、平
 大、小、望、を、ろ、ろ、ろ、ろ、い、た、近、が、故、障、あり、と、い、ひ、ろ、ろ、い、ろ、ろ、ろ、ろ、所、以、ろ、ろ、人、と、和、
 疑、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、疑、問、只、此、終、と、引、籠、居、ろ、ろ、ろ、ろ、二、旬、と、死、て、後、蟹、庵

務来り。た近こそ後妻を娶ふと云。和乎竹人の女を娶ると
 同ハ足下縁あり。前妻の妹相女ありと云。和乎世より死く
 を。これ永原が前妻世より一日この事を計ハ相女ハ前妻
 てあふりしを惣不猶縁も萬幸と云く。粗語より所詮縁
 此を定め。世中の美人集むよりあを限らんと。たらまら思を傳
 其のらこの事忘るるまで。弥た近と睡み分け。順年大津の
 駅ハ一個の退糧人あり。元ハ播州赤松の家士ありて石見太田と云
 何と定た久生業ハるれど親族不富家あり。扶持より此
 ありと云。驛舎不金をか。その息錢を得る家事の助と云。
 奴僕五六人養てその家母がぐく貧乏。八月廿三日の夜偷見
 二人石見が家小志のび入る。主人が金くたらはら二賊を捕り

つよく傳て一室不入おれ。左右は燭を照し。坐席を輝し。その
 後の出あ者あり。食厨遠く去り。昨響出ふ。而賊調眼。越
 云。猪と云。主人の氏夫あり。天明ハ。つら。將由は新刀を試
 小をわ免か。家小もねる不運さ。より。それこそ。一度ハ。劍下
 此鬼と云。死身。今。何。悔。人。と。あり。小。竟。朗。志。列。居
 たり。時刻中。より。寂。莫。不。堪。首。を。回。し。四。方。を。見。れば。左。邊
 の。壁。ハ。一。張。此。懸。幅。を。掲。て。紙。中。七。言。絶。句。を。録。り。一。個。の。偷。見。少
 去。漢。文。を。讀。得。たり。けん。あ。を。を。讀。み。その。待。み。云。

秋雨瀟瀟江上村
 相逢不用相回避
 世上如今半是君
 綠林豪客夜知聞
 偷見これを見て大におどろく。と云。小家僕業をさすけ。と云。而賊



市へ八傳を解つてと明見たる刀を引抜たらしはら素とまら
 といへばさ浪つとまわり。哥嬉し君が力小煩悩は霧を散ぬあれ
 えぬ心のうらうら多の庫わら。財の客房は南ふあり。卒ささし
 前ふまゆかど地りぞ散ハ消ぬ石見奇異の世心とま。これ
 づらまゝて空花の前ふひまら。鎖と幹用く呪笛を吹あうせバ
 裏賊くふ集来て金を偷去と數万兩。石見あらくくこをを
 松子運せる舟船とやありけん。おのまじきう強さるを。内房ふ志の
 入まハ次々主人は外房と石見焼くまらやて窓下ふ山雞の鼓
 あり。石見むらう笑くうらと音二の鳥と出しとあま鳥比頭
 をのびつる引ちまうてを捨たりける。左近軒着は音小鼓驚に竟
 腰刀を會てうらま出ま。石見をく焼くをうら滅く遊ゆを。

此とと追趕二人終ふ客房は庭小會く東風西風挑戦ふ
 この夜野干士の暗やて更ふ黑白も別ねが閃く刀光を賦ふ
 踏ましく切むまぶ石見やう中々拳をとる多りかしく此りまをいら
 くまぐのや追ゆが接樹下にひまらまらふ。左近おりて伏
 一條の麻索不跌にたらしら撲地仆けま。石見得たりとまらか
 肩尖うく劈割たりあまむむぞ一永原左近一朝の怒ふ幸
 正あまら終ふま浪が冤魂不縁と石見が白刃不命を割て。永
 泉下の鬼とやりぬ待あり澄とと。

善悪無分總喪軀
 勸君堪悉傾誠信

只因一念怒釀殃危
 短愿從來是禍基

